



Title	明治・大正期の国立博物館が収集した鳥類標本史とその現代的意義に関する研究 [全文の要約]
Author(s)	浅井, さやか
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第14801号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85314
Type	doctoral thesis
File Information	Asai_Sayaka_summary.pdf



博士論文の要約

博士の専攻分野の名称： 博士（農学）

氏名 浅井 さやか

明治・大正期の国立博物館が収集した鳥類標本史と その現代的意義に関する研究

自然史研究に利用される標本は、いつ、どこで採集されたかといった情報を備え、良好な状態で保管される必要がある（松浦 2014）。標本は採集された生物がその日、その場所で生息していた証拠であり、標本が研究に利用されれば、標本は研究結果を保証する役割を担うことになるからである。標本が研究資源として活用され続けるためには、採集地、採集日、採集者といった採集情報に加え、標本番号などの情報が適切に付属していなければならない。しかし、古い標本の中には、標本に添付されたラベルが汚損、あるいは破損で読めなくなったり、採集当時の記載内容の解釈が困難になったりなどで、十分な採集情報を得られず、学術標本として研究に利用しにくいものが存在する。このように採集情報が失われたとされる標本であっても、標本台帳や採集者のフィールドノートなどから帰属する標本群（コレクション）の成り立ちや採集者の背景を調べることで、採集情報を復元し、利用価値が低いとされていた標本の価値を向上させることができる（例えば、加藤 2012 など）。

本論では、タイプ標本や絶滅種の標本など学術的に重要な標本を含むにも関わらず、採集情報が明確でない標本が多い、東京帝室博物館がかつて所蔵していた鳥類標本群（以後、帝室博物館コレクション）の歴史的経緯を明らかにする。その過程で得られる資料から各標本の採集情報を復元することを目的とする。さらに、情報復元した標本が、現代の鳥学や博物館史などに対しどのような価値を有するのかといった、帝室博物館コレクションの意義について考察する。

帝室博物館コレクションの成立と歴史的背景

東京帝室博物館（以後、帝室博物館）は、東京国立博物館の前身である。現在の東京国立博物館は、文化財を多数所蔵するが、設立当初は動植物などの自然史標本を所

蔵していた。東京国立博物館の自然史標本は、関東大震災ですべての所蔵標本を焼失した国立科学博物館に大部分を移管したことが知られている(東京国立博物館 1973)。しかし、山階鳥類研究所(以後、山階鳥研)には国立科学博物館よりも多数の帝室博物館旧蔵の鳥類標本(帝室博物館コレクション)が存在した。また、山階鳥研の帝室博物館コレクションは学習院から移管されたことが知られていたが、帝室博物館から山階鳥研までの移管経緯は不明確であった。そこで第2章では、帝室博物館コレクションの歴史的背景を検討し、各標本の情報復元につながる資料の探策を行った。また、帝室博物館コレクションの一部が山階鳥研に所蔵されるに至った経緯も検討した。

その結果、帝室博物館コレクションは、東京国立博物館が設立した1872(明治5)年から、帝室博物館天産部が廃止された1923(大正12)年までに、東京国立博物館が収集した標本群であった。帝室博物館コレクションには、1890(明治23)年に、国立科学博物館が設立した1875(明治8)年から収集していた標本が統合されていた。帝室博物館天産部の廃止後は、自然史標本の大部分が国立科学博物館へ移管されたことから、帝室博物館天産部の鳥類標本台帳(天産部台帳)が国立博物館から見出された。この台帳に記載された収集経緯から、帝室博物館コレクションは、次の3つの標本群に分けられた。

- (1) 1872年から1889年までに東京国立博物館が収集した標本群。
- (2) 1875年から1890年までに国立科学博物館が収集した標本群。
- (3) 1889年から1923年までに東京国立博物館が収集した標本群。

各標本をこの3標本群に当てはめることによって、収集年代が限定され、採集日を確定、あるいは限定することができた。

山階鳥研には、帝室博物館コレクション3,349点を所蔵していたが、天産部台帳から帝室博物館コレクションの全体が把握できたため、山階鳥研にはコレクションの標本収集が終了した1923年時点のほとんど(83.0%)が現存していたことも判った。東京国立博物館と国立科学博物館の資料調査によって、山階鳥研への移管経緯は、1923年に帝室博物館天産部が廃止した後に、国立科学博物館に移管された標本のうち、学習院に貸与されたものが、1966年までに山階鳥研に移管されていたことが判った(図1)。

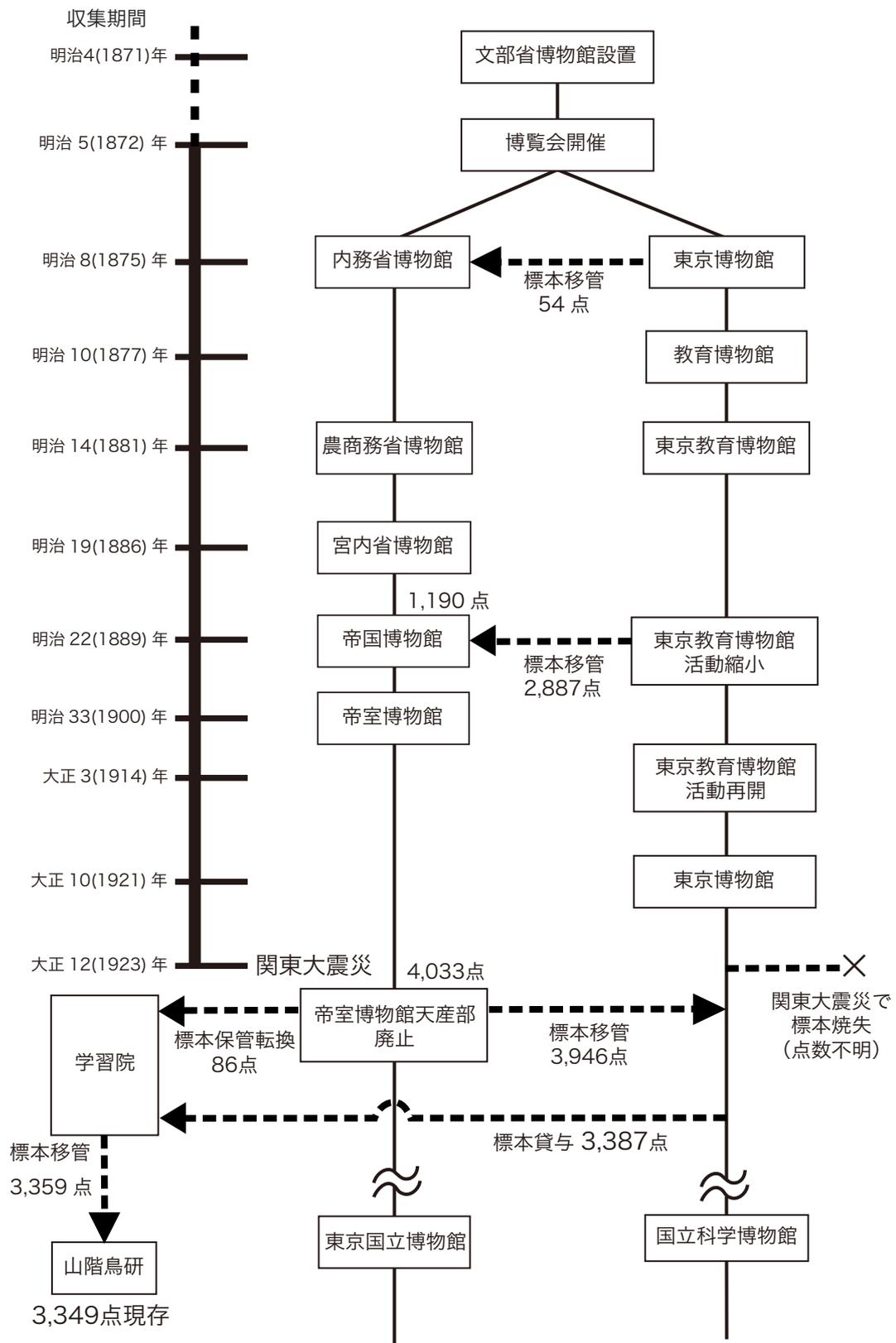


図1. 国立博物館の歴史と帝室博物館コレクションの移管の流れ。点線は標本の移動を示す。小林・加藤（2017）を基に改変。

帝室博物館コレクションを構成する主な標本群の歴史

帝室博物館コレクションの各標本の情報をより明確にするために、コレクションを構成する主要な標本群の歴史的背景を検討した。帝室博物館コレクションは、標本ラベルから海外の博物館に由来する標本が多数確認された。本論では第3章でスミソニアン国立博物館（スミソニアン）、第4章でオーストラリア博物館、第5章でフランス国立自然史博物館に由来する標本群を検討した。いずれの標本群も、標本ラベルなどから、各博物館に由来する標本であることが断片的に分かるのみで、入手経緯の全容は判っていなかった。

各標本群の背景を検討した結果、スミソニアン由来標本は、1877年にスミソニアンから東京国立博物館と国立科学博物館へ送付された2ルートと、1887年に国立科学博物館に送付された3つのルートによって、計1,321点を入手していたことが判った。このうち1,306点（98.9%）が山階鳥研に現存していた（第3章）。

オーストラリア博物館由来標本は、1888年に同博物館から国立科学博物館へ、1893年に東京国立博物館へ送付された2ルートによって、計329点を入手した。このうち326点（99.1%）が山階鳥研に現存していた（第4章）。また、フランス国立自然史博物館由来標本は、1877年に同博物館から国立科学博物館へ104点が送付され、このうち82点（78.8%）が山階鳥研に現存していた（第5章）。

さらに、各標本群の歴史的背景を検討する過程で、帝室博物館コレクションの各標本と照合できる旧蔵博物館の標本台帳などの資料が見出された。これにより、標本の採集地、採集日、採集者が復元できた。標本の採集情報が復元されたことで、これまで認識されていなかったタイプ標本を見出すことができた。また、各標本の種同定の誤りや、現在発信されている国際データベース情報の誤りが修正可能になるなど、各標本の学術的価値を向上させる成果が得られた（第3、4、5章）。

帝室博物館コレクションの情報復元

第6章では、帝室博物館コレクションの南鳥島産標本を例に、標本の歴史的背景から採集情報を復元し、情報が復元された標本の学術的な意義を検討した。

南鳥島は、小笠原諸島父島から東南東1,300kmの太平洋上に位置する日本最東端の海洋島である（図2）。帝室博物館コレクションには、天産部台帳で採集地が南鳥島

と記載された標本が 42 点あり，そのうち 26 点が山階鳥研に現存していた．天産部台帳には，採集日の記載はなかったが，全てが 1902，03（明治 35，36）年に寄贈され，6 件の寄贈者が記載されていた．現存する標本のラベルからも，採集日は不明であった．

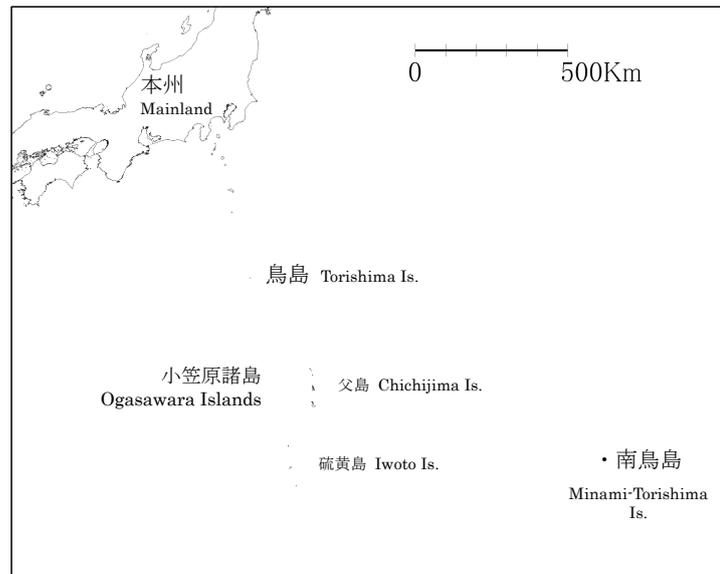


図 2. 南鳥島の位置

標本の歴史的背景を検討した結果，1902 年に起きた南鳥島事件に関連して帝室博物館（東京国立博物館）に寄贈された標本であったことが判明した．現存する 26 点の寄贈者は，上滝七五郎，秋元秀太郎であり，彼らの活動背景から，採集期間は，上滝寄贈標本では 1900 年から 1902 年 10 月 9 日，秋元寄贈は 1902 年 7 月 28 日から 8 月 29 日と推定された．

1902 年の採集当時の南鳥島には，11 種の海鳥が繁殖していたが，海鳥の乱獲や第二次世界大戦で島の環境が悪化したことなどで，1952 年までに 9 種の繁殖集団が消滅した（Bryan 1903, Kuroda 1954）．現存する南鳥島産標本の中には，消滅した繁殖個体群の標本が含まれていた．これらの標本は南鳥島で消滅した繁殖個体群を解明する上で，有効な研究資源としての価値が見出された．また，帝室博物館コレクションの南鳥島産標本は，明治期に海鳥の羽毛や剥製が日本から輸出された時代の歴史的資料としても位置づけられた．

本論の考察

第7章では、本論で復元した各標本の採集情報を整理し、帝室博物館コレクションの学術的価値を考察した。

本研究では、現存する帝室博物館コレクション 3,454 点の約半数 (50.5%) にあたる 1,743 点 (スミソニアン由来標本 1,306 点, オーストラリア博物館由来標本 329 点, フランス国立自然史博物館由来標本 82 点, 南鳥島産標本 26 点) の歴史的背景を解明し、標本情報を復元した。この成果は、これまで知られていた標本の情報を大きく修正、補うものであり、標本の研究資源としての価値を向上させた。

標本の採集情報が復元されたことで、東京国立博物館では、1923 年までに日本国内はもとより、アメリカ大陸、オーストラリア、アフリカ、東南アジア、ニュージーランド、南極など世界各地の鳥類標本を有していた。また、採集年次は 1819 年から 1923 年で、国内では屈指の歴史の古いコレクションであったことも明らかになった。

採集情報が復元された標本から、東京国立博物館と国立科学博物館が収集した標本を考察すると、東京国立博物館の標本は、外交や社会的な出来事によって収集されていた傾向があった。一方、国立科学博物館の標本は、学術研究の目的で収集されていた傾向が見られた。帝室博物館コレクションは、2 つの国立博物館の創設から収集した標本であり、それぞれの博物館の活動を反映したコレクションと考えられた。それゆえ、日本の博物館史の歴史資料にもなり得た。また、国立科学博物館の標本には、新種記載に用いられたタイプ標本が含まれ (Stejneger 1887a, 1887b, 1887c, 1887d, 1892), 帝室博物館コレクションは、草創期の日本の鳥学史の歴史資料にもなり得た。

帝室博物館コレクションに含まれる絶滅種の標本は、いずれも標本収集当時には絶滅しておらず、時間の経過の結果として絶滅種となっていた。温暖化など環境の変化が著しい昨今では、地域絶滅は増加していくと予想される。歴史の古い帝室博物館コレクションは、現代との比較において有効な研究資源になるなど、学術的価値は今後ますます高まると考えられた。

本論の皇室博物館コレクションの成立と歴史的背景（2章），皇室博物館コレクションを構成する主な標本群の歴史—スミソニアン米国立博物館由来標本群（3章），オーストラリア博物館由来標本群（4章）は以下の論文を参照されたい。

- 小林さやか・加藤 克 (2017) 明治・大正期に収集された国立博物館の鳥類標本コレクションの検証—山階鳥類研究所所蔵の皇室博物館旧蔵鳥類標本の歴史的背景とその評価—。タクサ 日本動物分類学会誌 43: 42-61.
https://doi.org/10.19004/taxa.43.0_42
- 小林さやか・加藤 克 (2020) 東京皇室博物館旧蔵鳥類標本コレクションの歴史—スミソニアン米国立博物館に由来する標本に注目して—。タクサ 日本動物分類学会誌 49: 45-55.
https://doi.org/10.19004/taxa.49.0_45
- 小林さやか・加藤 克 (2020) 東京皇室博物館旧蔵鳥類標本コレクションの歴史—オーストラリア博物館に由来する標本に注目して—。日本鳥学会誌 69(2): 209-221.
<https://doi.org/10.3838/jjo.69.209>

引用文献

- Bryan WA (1903) A monograph of Marcus Island. Occasional Papers, Bishop Museum 2(1): 77-126.
- 加藤 克 (2012) ブラキストン「標本」史。北海道出版会，札幌。
- 小林さやか・加藤 克 (2017) 明治・大正期に収集された国立博物館の鳥類標本コレクションの検証—山階鳥類研究所所蔵の皇室博物館旧蔵鳥類標本の歴史的背景とその評価—。タクサ 日本動物分類学会誌 43: 42-61.
- Kuroda N (1954) Report on a Trip to Marcus Island with Notes on the Birds. PACIFIC SCIENCE 8: 84-93.
- 松浦啓一 (2014) 自然史標本の収集と管理の指針。松浦啓一（編）標本学第2版 自然史標本の収集と管理: 3-7。東海大学出版会，秦野。

- Stejneger L (1887a) On a collection of birds made by Mr. M. Namiye, in the Liu Kiu Islands, Japan, with descriptions of new species. *Proceedings of the United States National Museum* 9(597): 634–651.
- Stejneger L (1887b) Further contributions to the Liu Kiu Island, Japan, with descriptions of new species. *Proceedings of the United States National Museum* 10(641): 391–415.
- Stejneger L (1887c) Diagnosis of a New Species of Thrush (*Turdus celaenops* sp. nov.) from Japan. *Science* 108(238): 108.
- Stejneger L (1887d) Zoology. Description of a new species of Fruit-Pigeon (*Tanthenas jouyi*) from the Liu Kiu Island, Japan. *The American Naturalist* 21(6): 583–854.
- Stejneger L (1892) Two additions to the Japanese Avifauna, including description of a new species. *Proceedings of the United States National Museum* 15(904): 371–373.
- 東京国立博物館 (1973) 東京国立博物館百年史. 東京国立博物館, 東京.